

撰集抄の「いまそかり」を中心に

桜井光昭

一

尊敬語「いまそかり」については、いろいろ問題がある。

第一に語形にイマソカリ、イマスカリ、イマシカリ、さらにはミマソカリと類似のものがある。これらは語形に多少の異同があるが、同類と認めて「いまそかり」で代表させる。それぞれを区別する場合はかたかな表記とする。イマスカリでなく、イマソカリで代表させるのは、撰集抄にイマソカリの語形が多いからである。

第二に「いまそかり」の「そ」「か」特に「か」の清濁が問題になる。これは必然的に語源説と関連が出てくる。語源^{語源}としては、尊敬語イマス^{イマス}を中核としてできたとするのが普通である。そのうちの一説は、イマスガアリの約としてイマスガリが成立し、そのまた転じたものがイマソガリ、イマシガリであるとする。筆者も以前にはこの語源説によってガと濁音にして扱っていたが、これからは清音カとする。理由は春日和男氏の説^説に従うためと、ロドリゲスの『日本大文典』および『日ゴ辞書』(イマスの項)

の表記が清音であるためとである。

春日和男氏はイマスの敬度を補強するため、イマスが作用言から形状言に転じてカリ語尾(形容詞補助活用に見られる)をとったものとされる。詳しくは、カリ語尾とガル語尾の混血児で、そのため、普通のカリ語尾の形容詞にはないイマスカリテのような、接統助詞テを伴った形もあるのだとされる。そして、カリ語尾があとからついたため、接統部のスガソ、シと動搖をきたしやす^すいという。なお、ミマソカリは、イマシ^{イマシ}に対するミマシと同じ関係だとされる。

筆者も「イマスガアリ」説については、第一にもとの語形の用例が発見されないこと、第二にノ、ガの尊卑による使い分けがあったとする説が一方に存在し、そのうちの軽卑表現に用いられるガをふくむ尊敬語があるのかということ、この二点に疑問を感じていた。その点、この春日説なら、いずれも障害とならない。また、筆者は今昔物語集のイマスカリなどは、イマスに情意的要素が付加されたものと考えているが、そのような情意的要素がカリ語尾にあるのではないかと思われる。(これは、敬意の補強と矛

盾するものではない。なお、情意的要素の付加については別の機会にゆずる。）

カリ語尾が他の語に付加されて一語を構成する例としては、現在も無理カラヌのカラに見られ、佐藤喜代治氏は中世の様カル、與カルのカルを白カル、多カルのカル、つまりカリ語尾とされている。^{注5}

春日氏は「いまそかり」を平安時代全期にわたる俗語で、漢文訓読には用いられないと述べられている。たしかに口語起源であったらう。

湯沢幸吉郎氏は『文語文法詳説』で、

平安朝時代に、ラ変動詞に「いますかり」「いまそかり」が現れた。これは「います」と同じく「あり、をり」の尊敬語である。（九二ページ）

とされ、諸辞書もこの域を出ないようである。つまり、オハスの類が、アリの尊敬語であると同時に行ク・来の尊敬語であるのに対し、「いまそかり」は行ク・来^{注6}の尊敬語の用例を欠くという点との示唆であらう。平安時代についてはこのとおりである。

さて、本稿の要点は次の三点に示される。

第一に、比較的用例が少ないといわれている「いまそかり」が、序と跋以外に一二一話からなる撰集抄に二二〇例という多数を算すること。

第二に、アリの尊敬語のほか、少数ながら行ク・来の尊敬語の用例があること。

第三に、位相的には、文語で、ロドリゲスが『日本大文典』に説くとおり、道心者の用語であらうということ。

なお、使用テキストは西尾光一氏校訂の岩波文庫『撰集抄』（底本は近衛本。他に六本による校異あり）である。

撰集抄は、近世までは西行作で通っていたが、現在では否定されており、成立も一三世紀中葉かとされている。^{注7} 文体面では、文語的色彩が濃厚である。^{注8}

二

前述のとおり、撰集抄には、序と跋を除いて一二一の説話があるが、それに対して「いまそかり」の用例は一二〇を算し、ほぼ一説話あたり一例という多数の用例がある（以下の数値は、諸本によっても異なるので、概数とみていただきたい）。「いまそかり」の用例は、一般的に見て珍しいというほどではないが、それほど使用率の高いものではない。たとえば、竹取物語がイマスカリ二例、伊勢物語がイマスカリ一例、イマソカリ六例、ミマソカリ二例、大和物語がイマスカリ一七例、源氏物語がイマスカリ一例（イマスカラフ一例）といったぐあいである。大和物語の一七例は、大和全体の分量に比べて、むしろ例外的に多いのである。したがって、撰集抄の一二〇例は、現時点では、他に類を見ない多さといつて過言ではない。^{注10}

次に、「いまそかり」の分布状態を巻別に、地の文・会話文に分けて示そう。会話文は広義のもので、いわゆる心語文もふくむ（作者の感慨は地の文に述べられる）。第1表がそれであるが、参

第 1 表

		オハシマス		マシマス		イマソカリ		オハス		イマス	
		地の文	会話文	地の文	会話文	地の文	会話文	地の文	会話文	地の文	会話文
巻 1 (8)		0	0	4	1	4	0	4	2	1	0
巻 2 (8)		0	0	2	2	9	0	2	2	0	0
巻 3 (9)		1	0	1	0	18	1	4	1	2	1
巻 4 (8)		2	0	1	0	19	4	5	4	2	1
巻 5 (15)		4	0	3	0	8	1	9	3	4	0
巻 6 (12)		5	2	7	1	16	0	8	1	3	0
巻 7 (15)		9	1	6	1	7	0	18	4	2	3
巻 8 (35)		8	3	1	1	16*	0	12	1	2	0
巻 9 (11)		11	1	3	1	16	1	4	1	0	0
計 (121)		40	7	28	7	113*	7	66	19	16	5

注 1 巻序の右の () 内は収録説話の数である。

注 2 イマソカリの欄にはイマスカリ 1 例がふくまれている。* がその印である。

注 3 本動詞・補助動詞の区別はしていない。以下の表も同じ。

考として、オハシマス、マシマス、オハス、イマスの数値もあける。

地の文では、イマスカリ一例をふくみイマソカリ一三例、会話文ではイマソカリだけで七例、計一〇例である。オハシマス四七例、マシマス三五例、オハス八五例、イマス二一例に比べ、もつとも数が多い。次に多いオハスに比べて三五例も多く、他は「いまそかり」の半数以下である。

また、「いまそかり」の用例はほとんどが地の文の用例である。地の文と会話文の数の比は、約一六対一である。これに対し、他語の、地の文と会話文の数の比は、オハシマスが約六対一、マシマスが四対一、オハスが約三・五対一、イマスが約三対一である。両者の比のもつとも離れているオハシマスが約六対一であるのと比べて、約一六対一という比は顕著な使用傾向を示すといえるべきである。

すなわち、撰集抄において、「いまそかり」は、同類の尊敬語オハシマス、マシマスなどに比べて、格段に使用率が高く、しかも地の文に使用例がいちじるしくかたよっている。

なお、「いまそかり」の用例のある説話は、一二一話中、六一話である。

活用形は、命令形を欠く以外はすべてそろいが、連用形に用例が集中している。次に未然形から、用例その他を示す。

未然形 (一例だけ)

此僧正は、六十にかたむき給ひぬれば、さやうの所を見い
まそからんもかなはでや侍らん。(一二話)

連用形 (一〇二例)

右の数値にはイマスカリ一例をふくんでいる。用法を見ると、ケリを伴うもの七三、ケンを伴うもの一六、キを伴うもの九、その他四である。その他は、イモヤスラン一、イテ二(一例はイマスカリ)、イヌ一であるが、最後のヌを伴う例は本によつてはメリを伴う連体形となつてゐる。

むかし、増賀上人といふ人いませかりける。(一話)

唱導は誰にかいまそかりけん。(一八話)

六十ばかりに傾きたる僧いませかりき。(二二話)

さても、なほ御命の消えやらで、天が下にながらへていませかりもやすらん。(二〇話)

はるく能登の境までいませかりて。(一七話)

終止形 (一例だけ)

ささらはいませかりとも、わきて身にしむまでは、後の世の事はおぼし入たまはじと、(三二話)

連体形 (一二例)

連体修飾の用法に立つものではなく、ランを伴うもの九、ニを伴うもの二、ベシを伴うもの一である。

玄賛僧都にやいませかるらんと、むかしのあと、ゆかしくぞ侍る。(六九話)

つひに果して、はやく世を捨てていませかるにこそ、貴く侍り。(一八話)

たちまちに憂き世をこりはてける心は、たればかりかはいませかるべきと、(二八話)

已然形 (四例)

ドモを伴うもの一、バを伴うもの三である。

世をすつる人多くいませかれども、眠りはすがたく侍るに、(二三話)

今さらかくなり出でいませければ、かしこくと、かへすくうれしく侍り。(二七話)

バを伴うもの三例のうち、二例は右のような順接確定条件に用いられているが、一例は次のように、並列的に事柄を示すのに用いられている。

後冷泉院かくれさせ給へる日、後三条院位につかせ給ひしかば、一方は俄かにめでたく、一方は歎きのなみだにしまれ、ひとりはずばらぎの位にいませければ、ひとりは無常の鬼にとられ給へり。(五〇話)

宮地幸一氏のあげられた宇津保物語の用例に比べると、活用形や用法による用例のかたよりがあるといえそうだが、一方、大和物語などでは、やはり連用形に用例が集まつており、はつきりしたことはない。

本動詞・補助動詞(ス・サスの下に来る用法はない)としての用法は自由である。ことに、本動詞としての用法の中には、前述のごとく、普通はアリの意味にのみ用いられるのに、行ク、来の意味に用いられているものが少数ながらある。次に全用例をあげ

行クの意の用例

此松島のありさまも、ゆくしくしづかにしてこゝろもすみ

ぬべきを、ふり捨てて、多くの海山をへだてて、はるく能登の境までいまそかりて、(一七話)

「いかに、いまだ無下にいとけなくおはすめるに、たゞ一人、いづちとてか、いまそかるらん」と尋ね侍しかば、(三話)

いまはいづれの浄土にかいまそかりけん。(三四話)

最後の例は、「いまは……いまそかるらん」とあれば、あきらかにアリの意であるが、「いまそかりけん」とあり、他に確実に行クの意の用例があるので、これも行クの意としておく。

来の意の用例

その日の傾くまで待ち侍りしに、夕になりて、僧正山の上よりいまそかりけり。(三三話)

その夜の夢に「粉川の観音なり」と名のり給ひて、貴げなる僧のいまそかりて、(二一〇話)

最後の例はイマスカリの例である。

アリの意の本動詞の用例や、補助動詞の用例は、各活用形の用例ではば尽きているので省略する。

三

「いまそかり」の特色は、使用対象の範囲の広さに現われている。第1表と同様に、オハシマス、マシマス、オハス、イマスと比較対照しながら、「いまそかり」の使用対象の範囲、ひいてはその敬度・位相を考察してみたい。

そのための表が第2表、第3表である。まず用例を地の文、会

話文、それぞれにおける用例に分け、地の文では同一説話における同一使用対象に用いられた用例は何例あっても一件と数え、会話文では、一連の会話において同じ話し手、聞き手を持つ会話文における同一使用対象に用いられた用例は何例あっても一件と数えた。

使用対象は、俗Ⅰ、俗Ⅱ、僧Ⅰ、僧Ⅱ、仏神の五つに区分した。会話文では、このほかに「その他」を設けた。五つの区分に直接該当はしないが、それらに準ずるものは「付」として、各区分の末尾に入れた。俗Ⅰは天皇・上皇・摂関が中心である。俗Ⅱは俗Ⅰに続く階層で、だいたいの納言級が中心である。僧Ⅰは僧正、僧都をはじめ上人と呼ばれる人が中心である。僧Ⅱをまったく出自の低い修行僧に限ったためと、僧を優遇する仏教説話という性格から、俗Ⅱに相当するような階層を僧Ⅰとした。そういうわけで、僧Ⅱに下限はない。仏神は仏神一般で、神鏡や霊などもふくむ。表中の番号は用例一件が存在する説話の番号である。第3表の会話文の方では、使用対象、聞き手、話し手の三つの要素があるが、使用対象と聞き手が一致する場合は使用対象で代表させる。標出の使用対象は△で表わす。

たとえば、第3表、マシマス、白河院の欄で、88(▽)とあるのは、使用対象と聞き手が同じで白河院、話し手は夢のお告げの話し手、ということである。また、オハス、永玄僧正の欄で、12△(オハス↑彌師非彌師)とあるのは、使用対象が永玄僧正、聞き手が永納言、話し手が興福寺貫首、ということである。これら二つの例の、68、12はそれぞれの用例が、第六八話

第2表 地の文の状態

区 分	使 用 対 象	オハシマス	マシマス	イマソカリ	オハス	イマス	会話文
俗一I	嵯峨の天皇	76					
	村上の御門	90					
	後冷泉院・女院		50				
	後三条院		50	50			
	白河院	68					マシマス
	故院(鳥羽)	108		108			
	天子		7				
	天子・藤氏の長者			111			
	女院		50	50			
	後宮の人々A				オハシマス 7		
	〃 B			50			
	御堂の大殿	115		99,109			
	大二条殿	50					
	富家入道殿	20,54		20,54			
	九条殿			111			
	清慎公	79		111			
	徳大寺				48		
	長岡の親王					49	
	唐の国王		82				
俗一II	百寮	111					
	殿上人A					88	
	〃 B					94	
	院の人々			108	108		
	蔵人の頭行成					94	
	大納言公任			90			
	大納言経信				12,102		
	大納言経信・中納言俊忠			106			
	大納言経信ら				62		
	大納言成通			107	105		
	中納言行平			87			
	中納言顯基			19,30	30		
	中納言顯基・故尼			19			
	中納言為頼				88		
	京極の大將国房		3				
	志賀の中將頼実			27	27		イマソカリ イマス
	小野の相公				80		

区 分	使 用 対 象	オハシマス	マシマス	イマソカリ	オハス	イマス	会話文
俗一Ⅱ	右馬頭顯長(道長子)	115		115			
	大納言若君			58			
	中納言北の方			29			
	中納言局	39			39		
付	七条の後の女房			4	4		
	観理大徳の父			114			
僧一Ⅰ	永 玄 僧 正		12	12			マシマス
	明 雲 僧 正	32		32		32	オハス
	永 縁 僧 正				37	37	
	真 範 僧 正			42	42		オハス
	行 慶 僧 正			103			
	行 尊 僧 正			103		103	
	行 尊 僧 正				104		
	隆 明 法 印			22			
	真 與 法 眼		10	10			
	行 賀 僧 都			8		8	
	一 和 僧 都			9	9		
	永 眼 大 僧 都			34	34		
	林 懷 僧 都		51	51			
	恵 心 僧 都			55,109	55,66,109		
	覚 英 僧 都			121			
	観 理 大 徳			114	114		
	仲 算 大 徳			64,65	64		イマス
	仲 算 大徳・浄蔵貴所			65			
	静 円 供 奉			18	18		
	慶 祚 大 阿 闍 梨			33			
	勝 円 阿 闍 梨			41	41		
	宗 順 阿 闍 梨				71		
	増 賀 上 人			1			
	迎 西 上 人			16			オハス
	見 仏 上 人			17	17		イマソカリ
	宝 円 上 人			22			イマス
	膽 西 上 人			23			
	範 円 上 人	29		29	29	29	
	性 空 上 人			58	58	58	
	空 也 上 人					64	
	覚 鏝 上 人				68	68	イマス
	内 記 入 道		36	36,66,112	36,66		オハス

区 分	使 用 対 象	オハシマス	マシマス	イマツカリ	オハス	イマス	会話文
僧—I	大 江 入 道			111	111		
	安 養 尼(恵心妹)			113	113		オハス
付	三 位 入 道			60			
	慶 緑 得 業				31		イマツカリ オハス
	高位にいたるべき僧ら (不特定)			31			
	玄 井 三 蔵		49				
	上 人(不特定)					49	
僧—II	唱 導 の 僧			18			
	観 釈 聖			20		20	
	平 三 郎 法 師			26			
	由 良 の 西 道(存疑)			28			オハス
	権 の 歌 の 聖		オハス 3				
	宇 津 山 の 僧				5		
	播 磨 の 僧			15			
	三 井 寺 の 僧			21			
	美 濃 の 僧		24	24	24	24	
	駿 河 の 僧					38	
	西 山 の 僧A			40	40	40	
	津 の 国 の 僧			46			
	信 濃 の 禅 僧			56			
	信 濃 の 禅 僧ら				56		
	武 蔵 野 の 僧				59		
	西 山 の 僧B			62			オハス
	相 模 の 僧				63		
	下 野 の 無 相 房				67		オハス
	信 濃 の 僧			69	69		
	吉 野 の 僧			70	70		
	故 尼			19			
付	伊 勢 の 尼				75		
	昔 の 賢 き 人				5		
	世 捨 て 人(不特定)			13			
	片 岡 山 の 佗 人			15			
	後世を弔う人(不特定)			26			
仏 神	仏	50, 59	8	117			
	仏 菩 薩	41	28				
	仏 神		73				
	釈 尊	49					

区 分	使 用 対 象	オハシマス	マシマス	イマソカリ	オハス	イマス	会話文
仏 神	本 尊	68					
	阿 弥 陀	75	68				
	観 音	41, 74		51			
	地 蔵 菩 薩	72, 113	72				
	遊女の長者実は普賢菩薩			58	58		
	不 動 尊	68			68		
	夢 の 僧 A	97					
	〃 B			110*			
	神	111		111			
	天 照 太 神	111					
	北 野 天 の 神						
	巖 島 の の 神	45	45	83		83	イマソカリ オハシマス 84
	宇 佐 の の 神		46				
	鹿 島 眷 属 の 神	73					
	鹿 島 眷 属 の 神		73				
	春 日 明 神		111				
	大 智 の 明 神		72				
付 聖 徳 太	神 鏡 子	111	111	111			
					105		

注 イマソカリの欄にはイマスカリ1件がふくまれている。*がその印である。

と第一二話にあることを示す。

第2表の右側の会話文とある欄の尊敬語は、同じ使用対象に対し、会話文でその尊敬語を使用した用例があることを示す、一種の参考欄である。同様に、第3表の右側の地の文とある欄の「有」は、同じ使用対象に対し、地の文で標記五種の尊敬語に関し、何らかの用例があることを示す。

なお、欄中に別の尊敬語が付記してあるものは、伝本によっては、その別の語が用いられていることを示す。

第2表、第3表において、付に入れたものは主観的理由もはいるが、たとえば、第2表俗I付の、長岡の親王は時代的に遠くさかのぼった存在、唐の国王は異国人ということ、普通の皇族、天皇と同一には扱えないので付とした。また、第3表僧I付の作者は、西行に擬せられる存在と目して、ここに入れた。

第2表、第3表の用例を集計すると、第4表のごとくになる。

地の文の用例は、使用者が作者に一定しているので、比較がしやすく、かつ用例も多い。地の文の用例を中心に、会話文の用例を参考に、使用対象の範囲や、敬度・位相を見ていく。オハシマス、マシマス、オハス、イマスの順に検討し、最後に「いまそかり」を検討する。

平安時代のオハシマスは和文語で、敬度が特に高い。^{注13}マシマスは訓読語で、敬度は特に高いが、主要な使用対

イマソカリ	オハス	イマス	地の文
39△(作者←中納言の局)	54△(富家人←春日の神 道殿託宣)		有
27(△←父)消息	74△(作者←山伏)	27(△←父)消息 74△(作者←山伏)	有
	12△(大納言←興福寺 貫首)		有
	42△(童←童)		有
17(△←作者)	16(僧実は△←大納言)	64(△←空也上人)	有
	36△(人←慈恵大師)	17(△←作者)	有
	113(△←恵心僧都)	68△(白河院←夢のお告げ)	有
31(旅の僧は△←作者)	31(旅の僧は△←作者)		有
31△(作者←俊恵法橋)	31△(作者←俊恵法橋)		有
	5(△←宇津山の僧)		有
	18(△←静岡供奉)		
	70(△←吉野の僧)		
	2(△←先の聖)		
	28(僧のちに△←西仙上人)		有
	62△(大納言ら←人)		有
	67△(←里人胸中)		有
	110△(←農夫胸中)		
111△(神鏡←清慎公)			有
オハス			
27△(←中将胸中)	27△(←中将胸中)		
	36△(←内記入道)		

第3表 会 話 文 の 状 態

区 分	使 用 対 象	オ ハ シ マ ス	マ シ マ ス
俗—I	白 河 院 女 院 東 三 条 の 執 柄 忠 通 公 頼 長 公 三条太政大臣若君	86△(←公任胸中) 54△(富家入←春日の神宣 道 殿 託 宣)	68(△←夢のお告げ) 54△(富家入←春日の神宣 道 殿 託 宣) 119△(人々←導師明遍)
俗—II 付	志 賀 の 中 将 頼 実 男 女 房	61(△←唐人亭子)	
僧—I	永 玄 僧 正 真 範 僧 正 行 賀 僧 都 仲 算(児時代) 迎 西 上 人 見 仏 上 人 覚 鑊 上 人 内 記 入 道 安 養 尼(恵心妹) 慶 縁 得 業 付 作 者	オハス	12(僧実は△←大納言 経 信) 8(△←十一面観 自在菩薩)
僧—II	あ と の 聖 由 良 の 西 道 西 山 の 僧 B 下 野 の 無 相 房		
仏 神	観 音 舎 利 天 照 太 神 北 野 天 神 白骨実は慈恵大師の頭	110△(←農夫胸中) 60△(作者←三位の 入 道) 84△(←文章博士胸中)	110△(←農夫胸中) 14(△←猛将の娘)
その他	志 賀 の 中 将 頼 実 父 犬		

第 4 表

		オハシマス	マシマス	イマスカリ	オハス	イマス
地 の 文	俗	I 9	5	11	2	1
	俗	II 3	1	14	14	0
	僧	I 2	5	35	22	9
	僧	II 0	2	17	11	4
	仏	神 17	11	7*	3	1
会 話 文	俗	I 2	3	1	1	0
	俗	II 1	0	1	1	2
	僧	I 0	2	3	10	3
	僧	II 0	0	0	4	0
	仏	神 3	2	1	1	0
	その他	0	0	1	2	0
総 計	地	31	24	84	52	15
	会	6	7	7	19	5
	文 計	37	31	91	71	20

注 *を付した数字には、イマスカリ1件をふくむ。

象は仏神・僧侶関係にかたよっている。オハスは和文語で敬度は高い。イマスは訓読語系の用法と、和文語系の用法とがあるように、前者においてもマシマスより敬度が低いと考えられるが、特に後者においてはオハスより敬度が低く、卑俗語的な語感を持つ場合さえある。

第4表において、オハシマスの地の文の使用対象は、仏神の一七がもっとも多く、次に俗Iの九である。撰集抄においても敬度が特に高いといえるかどうか、その可能性を検討する。俗I、僧I、仏神まではさしつかえない。ただ、俗IIの三件があると、敬度が特に高いとはいえなくなる。そこで、第2表について、この三件を検すると、百寮、右馬頭頭長、中納言局が、それぞれの使用対象である。このうち、百寮つまり百官のトップには俗Iに属するものがふくまれており、頭長は御堂の大殿道長の子であるから、これらは俗Iに属させてよい。けっきょく、待賢門院の女房、中納言局だけが例外となる。会話文で問題となるのは、俗IIの一件だけで、これも第3表によると、もろこしの話であるから、非現実的な使用対象として無視できよう。一件の例外だけで、オハシマスは、やはり敬度が特に高いといえる。仏神を使用対象とした用例が多いが、これは仏教説話の一つの型として説明がつく。オハシマスの場合、一見、顕著な変化はない。

マシマスの地の文の使用対象は、第4表に見るとおり、俗I五、僧I五、仏神十一、他に俗II一、僧II二である。前三者について、オハシマスと比較するならば、使用の比率において、俗Iを使用対象としたものが低くなっており、逆に僧Iを使用対象と

したものが高くなっている。この点、仏神・僧侶関係に主要な使用対象がかたよる傾向を残していると見られる。敬度の点については、俗Ⅱ一、僧Ⅱ二の使用対象の検討が先決である。俗Ⅱの一件は京極の大将国房を使用対象としたもので、国房については未詳であるが、本によつては京極大相国とあり、これならば俗Ⅰに属し、例外とはならない。僧Ⅱの二件は、極の聖と美濃の僧が使用対象である。前者は底本近衛本以外の諸本はマシマスのかわりにオハスを使用しており、マシマスでも文脈からみて不自然ではないが、オハスとすれば、まったく問題はない。後者は次のような部分に用いられている。

此世には、はかなきつぶねの僧の姿にてこそおはすとも、
いまは安養界の聖衆につらなりましますらん。

すなわち、仏として待遇されているものである。マシマスの場合も、敬度は特に高く、位相的特色もなお残存していると見て大過ないであろう。

オハスの、第4表の地の文の用例は、俗Ⅰ二、俗Ⅱ一四、僧Ⅰ二二、僧Ⅱ一一、仏神三である。僧Ⅰの用例が特に多いこと、俗Ⅰ、仏神の用例が少ないことが目だつ。俗Ⅰ二件のうち、後宮の人々Aの用例は諸本オハシマスを使用し、徳大寺の用例は「教へさせおはしし」の形で、本によつては「をしへさせ給へりし」となっている。仏神三例も、遊女の長者実は普賢菩薩、および聖徳太子の二件は本によつてオハシマスとあり、不動尊の用例は、本物の不動尊にはオハシマス、覺饒上人の化した不動尊にはオハスと使いわけたものである。ついでに、会話文の俗Ⅰ、仏神の各一

件について検討する。俗Ⅰの例は春日の託宣で忠通公について「道心のおはせぬ」はよくないと述べるところで用い、仏神の例は、観音が使用対象で、マシマスを使った本など異文がある。すなわち、オハスの使用対象のうち、俗Ⅰ、仏神に属するものは、オハシマス、マシマスなどの用例はど、確実な、典型的な用例はあるといいたい。しかし、僧Ⅰの用例は、確実に多い。普通の尊敬語は、使用対象の範囲に上限はなく、その敬度は下限によつて決定する。俗Ⅱ、僧Ⅱの用例が各十件以上あること（俗Ⅰ、仏神の用例の状態も参考になる）から、オハスは、オハシマス、マシマスより敬度が低いことがわかる。位相的には、俗Ⅱ、僧Ⅰ、僧Ⅱと、他の三語に比べ、もつとも使用の多いことから、オハシマスと同性質で、特にかたよりはないと見られる。（なお、会話文のその他の、犬を使用対象とした用例は、犬を前生の父母と考えることであろう。）

イマスの、第4表の地の文の用例は、俗Ⅰ、仏神各一件以外は僧Ⅰ、僧Ⅱに集中し、全一五件と少ない。このうち、俗Ⅰの用例は長岡の親王を使用対象とし、大昔の人物で非現実的な存在である。その点、仏神の用例、北野天神と相通するものがある。会話文の用例は、俗Ⅱ二、僧Ⅰ三がすべてである。俗Ⅱの用例は、貧僧から、昔捨てたわが子志賀中将頼実への消息中で志賀中将に使用したもの、旅先で会った山伏が作者への会話中で、同じく行きずりの男（山伏は「殿」で待遇）に使用したものである。イマスの敬度はオハスと同等以下で、僧への使用に用例が集中している点、位相的には訓読語系にかたよっているようである。

敬度と位相の面から組み合わせると、オハシマス↓オハス、マシマス↑イマスとなる。ロドリゲスは『日本大文典』（土井忠生氏訳註本五九〇ページ）にオハシマス、マシマスについて「書き言葉及び説教に使はれる」と述べている。四語とも、文語的色彩を帯び始めているのかもしれない。しかし、和文語、訓読語の位相的特色はまだ残存しているところがある。敬度は、オハシマス、マシマスが依然特に高いが、オハス、イマスはそれより低い。オハシマス、マシマスに比べて、オハスの敬度は前代より低下したか、少なくとも撰集抄においてより低い実態を示している。（本文の異同もあるが、大綱として右のようになれる。）

さて、問題の「いまそかり」について、第4表の地の文の状態を検討する。第一に気がつくことは、他の四語と違って、数字にかたよがないことである。しいていえば、仏神対象の用例が少ないが、各層にわたって使用されている。これは、後述のごとく、他の四語とは性格が異なるためと考えられる。敬度は、俗Ⅱと僧Ⅱことに僧Ⅱのあることから低いと認められる。撰集抄においては、敬度の高いオハシマス、マシマスの使用対象に仏神が比較的多いことに照して、「いまそかり」にそれが少ないことも傍証となる。しかし、敬度の点でも疑問がある。それは、俗Ⅰに後三条院、故院（鳥羽）などの使用対象例があるが、大鏡、今昔の「いまそかり」は敬度が低く、そのような使用対象を持つことは考えられないからである。平安時代の「いまそかり」は、伊勢、大和、宇津保あたりの方が大鏡、今昔あたりのそれより敬度がやや高いようで、いったん低下した敬度が撰集抄にいたって、また

やや高くなるのは間に断絶があるためと考えられる。

筆者は平安時代の「いまそかり」には、感情の高潮時や念を押す時に使用するという情意的要素があると考えている。次は今昔の用例である。

此ノ男共這入テ、老法師ノ顔ヲ見ルマ、「我ガ父ハ此ニ坐ルベト云テ、只臥シ丸ビテ、音ヲ挙テ泣叫ブ。（二十九の十七話）

話し手は播磨の国の下衆で田十余町を持つ男。それが失踪した老父をやっと探しあてたところ、死体となっていたという場合である。

しかし、撰集抄の「いまそかり」には、そのような情意的要素は認められない。そのような特殊な語感の語が、撰集抄のように多用されることじたい疑問であるが、次の例でも情意的要素の消失は明らかである。

唱導は誰にてかいまそかりけん。さしも道心こもり、さきらありし人とは覚えず侍りき。（一八話）

唱導は別に重視されているわけではなく、その場に乞食のなりをした静円供奉がいたことが主題である。説話の導入部分で、「唱導はだれだったのかしら」くらいの軽い気持ちで、「いまそかり」を使用して唱導にいちおうの敬意を表したに過ぎない。

このように見えてくると、撰集抄の「いまそかり」が前代のそれとの間に断絶があり、性格の異なったものとなっていることがわかる。すなわち、第1表に見たように、地の文に用例がかたより、情意的要素が消失し、敬度は低いが使用対象の階層に関して

は広くニュートラル（オハシマスその他に比べて）な傾向がある。また、平安時代にはないと目される行ク・来（の用法もある。

ここでロドリゲスの『日本文典』の記述を引用しよう。

‘道心者’ (Dōxinjas) のものには Imaso carigueri (いまそかりけり) の語が見られる。例、Muaxi Sogaxontoyū

fito imaso carigueri. (昔、¹⁶義賢聖人といふ人いまそかりけり)「西行」(Saigū) 巻一(廿¹⁶冊生氏世世¹⁶ノ一)

末尾の西行の部分、長音符を欠いている。右の引用は撰集抄からとされているが、このままの文はない。巻一の第一話の冒頭部分が類似している（連用形の用例として掲掲）。

この記述を念頭に、オハシマスなど四語とは性格を異にする点について検討しよう。これら四語については、使用対象との関連を重視したが、「いまそかり」については、むしろ使用者（書き手、話し手）との関連を重視すべきだったのである。「いまそかり」をこのように多用した書き手は、いうまでもなく、西行に擬せられた出家遁世者である。会話文の話し手を第3表で見ると、全七件のうち五件の話し手が出家遁世者である。作者二件、俊恵法橋一件、志賀中将父（貧僧）一件、中納言の局（主君待賢門院歿後、出家）一件がそれである。残り二件は、志賀中将胸中（使用対象は父である貧僧）、清慎公（使用対象は神鏡）である。この二件は例外である。（他の四語においても、出家遁世者が話し手になっている例がやや多いが、素材の關係上、当然である。）作者が出家遁世者であるためという説明で十分であろう。

事実、慶政上人作かと言われる仏教説話集、閑居友（一二三二

年成立）にも、すでに同種の「いまそかり」と思われるもの数例がある。

文治二年ノ春、建礼門女院、世をすてゝこもりゐさせたまへるもとに、いかさまにしていまそかるらむとて、夜おこめて、しのびの御幸ありけり。（下、八）

撰集抄の「いまそかり」は、前代の「いまそかり」との間に断絶を有し、まさしく文語で道心者の用語と認められる。

ただ、中世の道心者がすべて常用したというわけでもないの

で、どのような場合に現れやすいか、今後研究の必要がある。方丈記、徒然草、あるいは平家物語、太平記など著名な作品にも現れない「いまそかり」が宝永八年（一七一）刊の傾城禁短氣に突如として用いられている。すなわち、

太夫暫くは狂女の如く啼狂ひしが、我と心を取直し、俄に機嫌を作り、首尾よく婚礼済みて二月ばかり過て、段々亭主に出家の暇を貰ひかけ、つゝに身を墨染となして、鎌倉の尼寺に、行ひ澄ましていまそかりけり。（一之巻、第二）

である。これは出家遁世の部分に用いられたもので、当時、「いまそかり」が出家遁世談を語る道心者の用語として知られていたことを示す。

本稿は、昭和四十八年一月二十七日の早大國語学会の研究発表の草稿に基づいたものである。

注1 『倭訓栞』（増補語林本）には「いましげあるの義げあ反

がなり」とある。

2 春日和男『存在詞に関する研究』二七～三〇ページ。二九二～二九五ページ。

3 注2のほかに、山口佳紀「古代日本語における語頭子音の着脱」(昭和四七年一〇月二一日国語学会研究発表)。

4 桜井光昭『今昔物語集の語法の研究』一三五ページ。

5 佐藤喜代治『講座国語史3』二一八ページ。

6 なお、関係論文として次のものがある。佐藤宜男「尊敬語『いますかり』の性格」(藤女子大学国文学雑誌10)

7 西尾光一『撰集抄』解説。長野省一「説話文学辞典」(石原昭平撰集抄の項)。

8 桜井光昭「撰集抄の『みそなはず』について」『説話文学研究六』。

9 以下の数値は、次による。

山田忠雄『竹取物語総索引』、大野晋・辛島稔子『伊勢物語総索引』、塚原鉄雄・曾田文雄『大和物語語彙索引』、池田亀鑑『源氏物語大成』。

10 宮地幸一「おはす活用考」、三浦和雄「文法指導に必要な用例発見レポート(2)」『月刊文法』昭和四十四年一月号。

11 西尾光一氏の付された説話番号を用いる。以下同じ。

12 宮地幸一「おはす活用考」九四三～九四四ページ。

13 源氏物語その他の状態がよく知られているから、いちいち文献はあげない。筆者としては、今昔の状態を調査したことがある。マシマス以下についても同様。桜井光昭『今昔物語

集の語法の研究』。

14 今昔物語集(十九の三話)参照。

15 小久保崇明『大鏡の語法の研究』一七〇～一七一ページ。

16 真管が逆上して天皇を使用対象とした用例が「あて宮」(原田芳起氏校注、角川文庫本、中巻、八六ページ)にある。これは、むしろ不敬の表現と考えられる。

17 日本古典文学大系(山田孝雄氏ほか三氏校注)による。

18 永井義憲・筑土曙生『閑居友』(古典文庫)をテキストとし、その解説を参考とした。濁点は私に付した。

19 日本古典文学大系(野間光辰氏校注)による。

執筆者紹介(掲載順)

桜井光昭 教育学部教授

津本信博 教育学部専任講師

日下力 岩手大学教育学部助手

岩下紀之 昭48・3大学院修士課程修了

中島国彦 文学部助手

大野保 大11高等師範部国語漢文科卒

奥田勲 宇都宮大学助教授

赤羽学 岡山大学助教授

陣ノ内宜男 教育学部教授

山路平四郎 文学部教授

藤平春男 文学部教授